

感情表現のための LINE スタンプの使用

～ LINE メールへの依存度および性別の比較 ～

加藤尚吾^{*1}, 加藤由樹^{*2}, 小澤康幸^{*3}

*1 東京女子大学, *2 相模女子大学, *3 明星大学

Emotional Expression Using Stickers in LINE Communication: Comparison by LINE Dependency and Gender

Shogo Kato^{*1}, Yuuki Kato^{*2}, Yasuyuki Ozawa^{*3}

*1 Tokyo Woman's Christian University, *2 Sagami Women's University, *3 Meisei University

大学生 300 名を対象にして、LINE のスタンプの普段の使用頻度および7つの感情（喜び、驚き、悲しみ、不安、怒り、罪悪、愛）を表現するためにスタンプを使用する頻度を調査し、性差およびLINE メール依存の程度による差を検討した。その結果、スタンプの使用に関しては、女性の方が男性よりも多いが、LINE メール依存の程度による差は見られなかった。また、感情表現に関しては、喜び、驚き、悲しみ、罪悪、愛を表現するために、女性の方が男性よりもスタンプを使用していた。また、喜び、悲しみ、不安を表現するために、LINE メール依存の高い人の方が低い人よりもスタンプを使用していた。

キーワード: LINE, スタンプ, LINE メール依存, コミュニケーション, 性差

1. はじめに

現在、スマートフォンの普及によって生活が便利になる一方で、様々な問題も生まれている。それらの中にはインターネット依存や中毒という問題もある。ネットゲームへの依存や中毒はその代表であるが、今日では日常的なコミュニケーションメディアとなったスマートフォンを用いたコミュニケーションへの依存は、誰もが生じうる身近な依存と考えられる。そうした中で、筆者らは、スマートフォンで使用されるLINEアプリケーションに注目して、利用者のLINEメールへの依存の程度とLINEメールコミュニケーションの関係について様々な検討を行っている。⁽¹⁾

LINEメールの主な特徴は、受信者がメッセージを読んだことをその送信者に自動的に伝える既読表示機能と、スタンプと呼ばれるイラストのやりとりができる機能である。そこで本研究では、LINEメールのスタンプに注目した。具体的には、LINEメールコミュニケーションにおけるスタンプの使用頻度および感情表現のためにスタンプを使用する頻度とLINEメール

依存の程度および性別の関係を検討した。感情表現に焦点を当てた理由は、コミュニケーション過程での利用者の感情面とそのコミュニケーションへの依存の程度の間に関連があると考えられるためである。

2. 方法

情報リテラシー関連科目を履修していた大学生 300 名（男性 148 名、女性 152 名、平均年齢 20.12 歳、レンジ 18-26 歳）が本研究の質問紙調査に参加した。

質問項目は、普段のスタンプの使用頻度を尋ねる項目、及び「喜び」「驚き」「悲しみ」「不安」「怒り」「罪悪」「愛」の7つの感情を表現するためにスタンプを使用する頻度を尋ねる項目であり、それぞれ6段階評定（1:全く使わない～6:ほぼ毎回使う）で回答を求めた。また、LINEメール依存の測定には、「携帯メール依存尺度（短縮版）」⁽²⁾を用いた。この尺度では各質問項目の中でコミュニケーションツールが「メール」になっているが、本研究ではこれらをLINEに置き換えた。なお筆者らは、この尺度の使用及び各項目のメ

ールを LINE に置き換えて使用することについて作成者の許諾を得ている。この尺度は「情動的な反応」、「過剰な利用」、「脱対人コミュニケーション」の3つの下位尺度から構成され、各下位尺度には5項目の質問があり、それぞれ5段階評定(1:全くあてはまらない～5:非常にあてはまる)で回答を求める形式である。

3. 結果

LINE メール依存の程度による参加者の群分けのために、参加者ごとに各下位尺度の平均値を計算し、これらを変数としたクラスター分析を行った。その結果、彼らは2つのクラスターに分けられた。これらをLINE メール依存度の高群(n=154)と低群(n=146)とした。普段のスタンプの使用頻度に関しては、女性の方が男性よりも平均値が高く、LINE メール依存高群の方が低群よりも平均値が高かった。そこで、2要因分散分析(性別要因 × LINE メール依存要因)を行った。その結果、性別で有意差が見られた($F(1,295) = 46.92, p < 0.001$)が、LINE メール依存の高低群間に有意差が見られなかった。なお、交互作用は見られなかった。続いて感情表現のためのスタンプの使用頻度に関しては、7つの感情すべてで、女性の方が男性よりも平均値が高く、LINE メール依存高群の方が低群よりも平均値が高かった。そこで、7つの感情それぞれに関して、2要因分散分析(性別要因 × LINE メール依存要因)を行った。以下に、7つの感情ごとの分散分析の結果を示す。「喜び」は、性別で有意差($F(1, 296) = 73.79, p < 0.001$)、LINE メール依存度で有意傾向($F(1, 296) = 3.55, p = 0.061$)が見られた。「驚き」は、性別で有意差($F(1, 296) = 6.03, p < 0.05$)が見られたが、LINE メール依存度では有意差が見られなかった。「悲しみ」は、性別で有意差($F(1, 295) = 40.71, p < 0.001$)、LINE メール依存度で有意傾向($F(1, 295) = 3.15, p = 0.077$)が見られた。「不安」は、性別では有意差が見られなかったが、LINE メール依存度では有意傾向($F(1, 295) = 3.19, p = 0.075$)が見られた。「怒り」は、性別及びLINE メール依存度で有意差が見られなかった。「罪悪」は、性別では有意差($F(1, 296) = 22.66, p < 0.001$)が見られたが、LINE メール依存度では有意差が見られなかった。「愛」は、性別で

有意差($F(1, 295) = 45.72, p < 0.001$)が見られたが、LINE メール依存度では有意差が見られなかった。なお、7つの感情すべてで交互作用は見られなかった。

4. 考察

喜び、驚き、悲しみ、愛を表現するために、女性の方が男性よりもスタンプを使用していた。喜び、悲しみ、不安を表現するために、LINE メール依存の高い人の方が低い人よりもスタンプを使用していた。以上の結果から、女性も依存の高い人もどちらもスタンプで表現する感情の種類が多いが、それぞれの使い方に違いがある(例:依存の人の「不安」の表現)と考えられる。スタンプは感情表現に限らず多様なメッセージの役割を持つ⁽³⁾ため、普段の使用頻度に性差は見られたが依存度による差が見られなかったことから、スタンプの持つ役割に対する有用性の認識に性別や依存度による違いがあるのかもしれない。また、怒り、罪悪に関しては、性別でも依存度でも差が見られなかった。この結果から、怒りや罪悪はネガティブ感情であり真剣な状況で生じる感情であるため、娯楽的な要素の大きいスタンプ⁽³⁾がこれらの感情表現に用いられることは比較的少ないのだと考えることができる。

謝辞

本研究は、科研費 15K01089, 15K01095 の助成を受けて実施しました。感謝いたします。

参考文献

- (1) 加藤尚吾, 加藤由樹, 北澤武, 宇宿公紀: LINE におけるネガティブ感情が生じるまでの返信の待ち時間とLINEへの依存度との関係～未読状態と既読状態に注目して～. 日本教育工学会第32回大会講演集, pp.317-318 (2016)
- (2) Igarashi, T., Motoyoshi, T., Takai, J., & Yoshida, T.: No mobile, no life: self-perception and text-message dependency among Japanese high school students. *Computers in Human Behavior*, 24(5), pp.2311-2324 (2008)
- (3) 加藤由樹, 加藤尚吾: LINE スタンプの特徴の解説と情報処理学会公式LINEスタンプへの期待. *情報処理*, 58(4), pp.274-277 (2017)